

イギリスにおけるデビットカード利用の急伸について

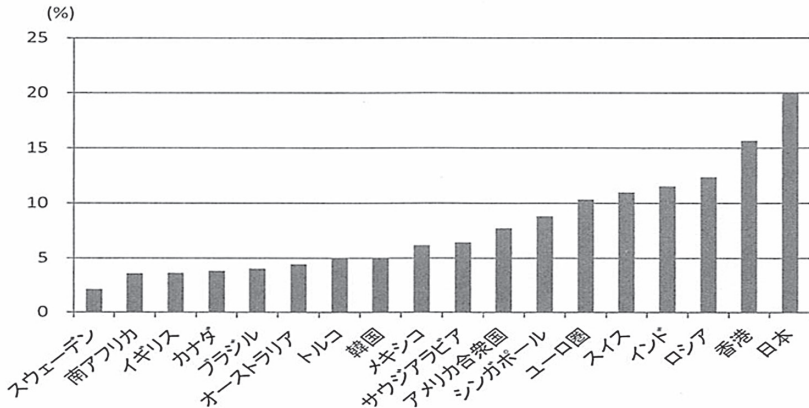
齊藤 美彦

はじめに

日本においては、二〇一四年六月に閣議決定された「日本再興戦略改訂二〇一四」において、現金（銀行券および硬貨）の使用をできるかぎり削減するキャッシュレス化を推進する方針が打ち出された。日本は個人のペイメントにおいて現金使用の比率が高いことが従来から指摘されてきた。現金の使用額ではなく残高（対GDP比）ではあるが、図表1をみるならば国際的比較において日

本その比率の高さがわかるであろう。これは日本の治安が比較的よいことや、近年の低金利が現金保有の機会費用を低下させている等の要因もあろう。また、伝統的小切手社会といわれるアメリカ（ドル札の半分以上は海外で流通しているといわれているので、国内の残高は図表1よりもちろん低い）やイギリスでは低いということも考えられる。しかし小切手社会ではないスウェーデンやデンマーク等の北欧諸国においてはキャッシュレス化が進展して、低金利にも関わらず現金残高が減少傾向にある。世界的に個人のリテール・ペイ

図表1 GDP比の銀行券・コイン (2014年)



〔出所〕 淵田 [2016] 13頁

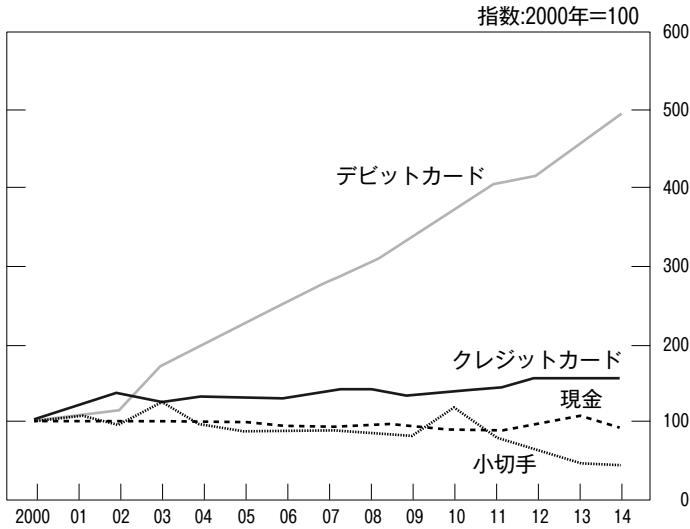
メントには大きな変化が起きつつあるのかもしれない。

本稿においては、以下で伝統的小切手社会であったイギリスにおいて、近年デビットカード利用が急伸していることを紹介し、それがどのような要因によるものなのか、そのことの影響はどのようなものか等について検討することとしたい。

一、近年の支払手段の動向

図表2は、イギリスにおける支払回数でみた近年の支払手段の動向である。一見してわかるとおりデビットカードが、急激にその支払回数を伸ばしている。二〇一四年において支払回数の五二％はまだ現金であるものの（二〇一五年には五〇％以下となった）、支払金額ベースでは、現金が一六六〇億ポンド、デビットカードが三六二〇億ポ

図表2 支払手段（定期支払除く）の動向

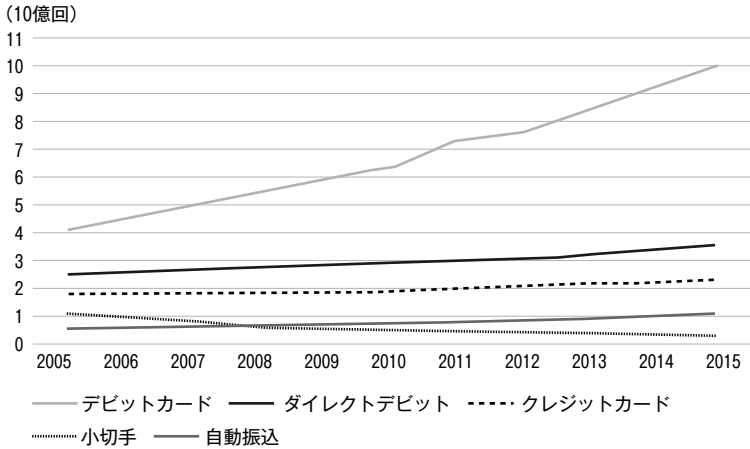


〔出所〕 Fish and Whymart [2015] p.5

ンドと後者が前者の二倍以上となっている。Fish and Whymart [2015] は、イギリスの支払決済は、歴史的にみて一七世紀から一九六〇年代までは、小切手・銀行券・コインが中心であったが、一九六六年のクレジットカード、一九六八年の自動決済（ダイレクトデビット・ダイレクトクレジット）、一九八七年のデビットカード、二〇〇八年のファースターペイメント（小口の同日決済振込）のそれぞれの開始は、個人のペイメントの態様を大きく変えたとしている。

図表2は、二〇〇〇年を一〇〇として各支払手段別の支払回数（伸びをみたものであるが、図表3は実際の支払回数（消費者・現金を除く）の推移をみたものである。これを見るならば近年のデビットカード利用の伸びは、小切手の支払回数の低下よりもかなり大きく、現金を代替していることによるものであるといえそうである。もうひと

図表3 非現金支払回数（消費者）

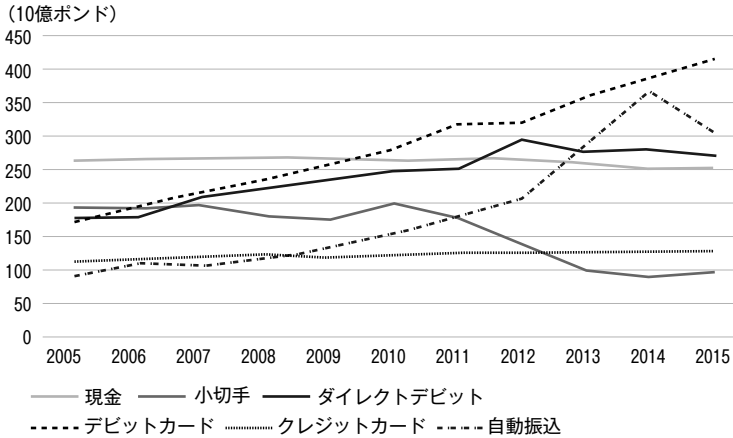


〔出所〕 Payments UK [2016] p.19.

つの大きな特徴は小切手の支払回数がすでにそれほどではなかったものの、直近では非常に少ないものとなっているということである。

また、図表4は、現金を含めた消費者の支払金額の推移をみたものであるが、現金による支払金額は安定的であることがわかる（若干の低下傾向）。そしてここでもデビットカードが伸びており、二〇〇〇年代末に金額では現金を逆転している。そうするとデビットカードは小口のペイメントにおいて現金を代替しているといえそうである。また、小切手は支払回数ベースでは大きく低下しており、イギリスはもはや小切手社会とはいえない状態となっている。ただし支払回数においては低下してはいるものの、一定の支払金額は維持しており、消費者ベースにおいても小切手は高額を支払に用いられていることがわかるであろう。

図表4 支払金額(消費者)



〔出所〕 Payments UK [2016] p.20.

なお、図表4においてはダイレクトデビットが着実に増加していることが注目される。いわゆる自動引落であるが、一九六八年の導入以来イギリスの銀行界はその普及に苦勞してきた。日本ではすぐに普及したダイレクトデビットが、なぜイギリスでは普及に苦勞したかということ、そこにはイギリスが小切手社会であったということが大きく影響していたといわれている。例えば伝統的なクレジットカードの利用額のイギリスにおける支払方法は、請求書が届いた後に、利用額を確認し、最低支払金額以上の任意の金額の小切手を郵送するというものであった。イギリス人は、このように自分の支払う金額について、自分でコントロールしたいというメンタリティが強く、毎月の支払額が変動するダイレクトデビットの普及の障害となっていたといわれていた。イギリスにおいて普及していたのは毎月の支払額が変動しないスタン

ディングオーダー（定額支払、変動する支払額）については年に一回程度調整）であった。ダイレクトデビットの普及は、イギリス人の支払決済に関する嗜好の変化と大きく関連しているように思われるのである。

二、デビットカードの登場とペイメントの変化

前述の通りイギリスにおいてデビットカードが登場したのは一九八七年のことである。イギリスは伝統的小切手社会であるといっても、それは小切手の大衆利用が大昔から一般的であったということではない。イギリスの商業銀行が大衆化を本格化させたのは第二次世界大戦後のことであり、制度的な消費者信用業務に進出したのは一九五〇年代末のことである。この時期以降、イギリスの

商業銀行の対個人戦略は、それ以前よりも積極化し、個人の当座預金口座保有も拡大していった。

この個人の当座預金保有の拡大、すなわち小切手利用の拡大は、不渡小切手数の増大という事態を招き、小売店等における小切手受け取り拒否を招くこととなった。これに対応して登場したのが小切手保証カードであり、その最初のものは一九五〇年一〇月に導入された。銀行は優良顧客にたいしては小切手保証カードを発行し、そのカードの提示が確認された小切手については不渡となつた場合においても、カード記載の限度額までの支払いを銀行は小売店等にたいして行つた。小売店等ではカード限度額以下の小切手しか受け取らなくなり、このことは小切手の使い勝手を悪くしたものの、個人の小切手の流通性の増加につながり、カードの普及は当座預金保有、小切手利用を促進した。また、その後この小切手保証カードの

図表5 プラスチックカード発行枚数（1991 - 97）

（単位 1000枚）

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
クレジットカード	29,025	28,631	27,588	28,456	30,778	34,149	38,443
Master Card	11,554	11,169	10,351	10,891	11,656	12,829	14,533
Visa	15,941	16,109	15,916	16,225	17,646	19,710	22,275
その他	1,531	1,442	1,321	1,340	1,476	1,599	1,635
デビットカード	20,114	22,596	24,118	26,049	28,441	32,473	36,646
Swich	11,804	12,377	12,930	13,811	15,162	16,295	18,287
Visa	8,310	10,219	11,188	12,238	13,279	16,178	18,359
ATMカード ¹⁾	27,200	26,968	26,580	25,986	26,835	24,702	24,320
小切手保証カード ²⁾	8,281	7,487	5,924	4,582	4,142	3,754	3,451
ユーロチェックカード	1,875	1,734	1,674	1,696	1,634	1,575	1,496
総計	86,496	87,396	85,884	86,769	91,830	96,642	104,355

（注） 1. ATMカード機能のみおよび小切手保証カード機能の付加されたもの。

2. 小切手保証カード機能のみ。

〔出所〕 APACS [1998] p.30.

限度額は段階的に引き上げられるとともに、キャッシングカードと一体化し、さらにデビットカードと一体化するのが通例となっていった。

ただし、個人の小切手利用の拡大は、銀行にとってそのハンドリングコストの増加が問題として認識されるようになってきた。また、小切手保証カードの損失は完全に銀行負担となっていたことも、銀行からすれば問題であった。一方、消費者側からしても小切手帳を常に携帯するのは煩雑なことであったし、他人が小売店等で小切手で支払う際に、小切手保証カードの確認に時間がかかり、長時間待たねばならないという不満もあった。このことは小売店等においても問題として認識されていたし、これに加えて小切手を入金した場合の資金化までの時間が長いことにも不満があった。

このような状況下において一九八七年に導入さ

イギリスにおけるデビットカード利用の急伸について

図表6 カード支払回数・金額 (1991-97)

		1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
支払回数		(単位 100万回)						
	クレジットカード	699	724	748	815	908	1,025	1,128
	Master Card	274	265	272	295	325	364	404
	Visa	387	416	431	472	532	601	661
	その他	38	42	44	47	51	60	63
	デビットカード	359	522	659	808	1,004	1,270	1,503
	Switch	169	269	344	425	535	684	802
	Visa	190	253	315	383	468	587	701
	総計	1,058	1,246	1,407	1,623	1,912	2,296	2,631
	支払金額		(単位 100万ポンド)					
クレジットカード		28,615	30,727	33,341	37,532	42,508	50,330	58,057
Master Card		11,046	10,905	11,776	13,149	14,729	17,239	19,760
Visa		14,907	16,526	17,789	20,055	22,821	27,292	31,718
その他		2,662	3,296	3,776	4,327	4,958	5,800	6,579
デビットカード		9,508	13,840	17,870	22,424	28,456	37,056	45,058
Switch		4,507	6,997	9,134	11,602	14,971	19,697	23,789
Visa		5,001	6,844	8,735	10,822	13,485	17,358	21,270
総計		38,123	44,567	51,211	59,956	70,964	87,386	103,115

(注) イギリス国内発行カードの国内支払回数・金額

【出所】 APACS [1998] p.34.

れたデビットカードは、小切手を代替する形で、その支払回数・金額を伸ばしていった。一九九〇年代のカード発行枚数を図表5でみるならば、一九九〇年代の半ばでデビットカードはクレジットカードに追いつきつつあることがわかる。これは、デビットカードがキャッシュカードと一体化していることによるものである。デビットカードは、発行枚数が増加しているだけでなく、実際に数多く使用されるようになっていった。図表6は国内発行カードの国内支払回数・金額をみたものであるが、デビットカードの支払回数は、一九九五年以来クレジットカードのそれを上回っている。しかしながら、支払金額でみるならば、デビットカードのそれはクレジットカードを一九九七年においても下回っている。デビットカードはクレジットカードよりも平均的な一回あたりの使用金額が少額であるという傾向があり、このこと

図表7 ペイメントの態様（個人：回数ベース）

（単位 %）

	1976	1981	1984	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
現金	93	88	86	80	78	78	76	76	72	71	70	67
非現金	7	12	14	20	22	22	24	24	28	29	30	33
（非現金支払中の比率）												
小切手	68	68	64	55	52	49	45	41	38	33	30	26
ダイレクトデビット	21	20	22	23	23	24	25	26	26	27	28	27
プラスチックカード	7	9	13	18	20	23	26	29	33	37	41	43
クレジットカード	6	8	12	15	15	14	14	14	15	16	17	17
デビットカード				2	4	8	11	13	16	19	22	24
流通系カード		1		1	1	1	1	2	2	2	2	2
その他	2	2	1	4	5	3	4	4	3	3	2	4

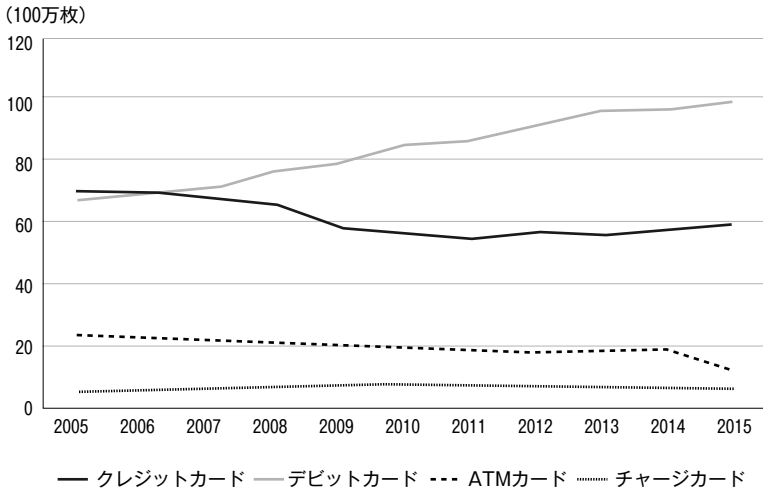
〔出所〕 APACS [1998] p.47.

から小切手代替のみでなく現金代替の支払手段となつていく可能性を有しているといえる。

図表7は、一九七六年から一九九七年までの約二〇年間のイギリスにおけるペイメントの形態（回数ベース）をみたものであるが、現金によるペイメントから非現金ペイメント（基本的には銀行預金による決済）への大きな流れをみてとることができる。その意味で一九九〇年代におけるデビットカード利用の急伸は、小切手代替として進展したわけであるが、現金によるペイメントから預金によるペイメントへの大きな流れとしてとらえることもできる。そして二一世紀入り以降のデビットカード利用のさらなる急伸は、イギリスにおけるキャッシュレス化を進行させる方向での動きであるともみなすことが可能であろう。

イギリスにおけるデビットカード利用の急伸について

図表8 カード発行枚数



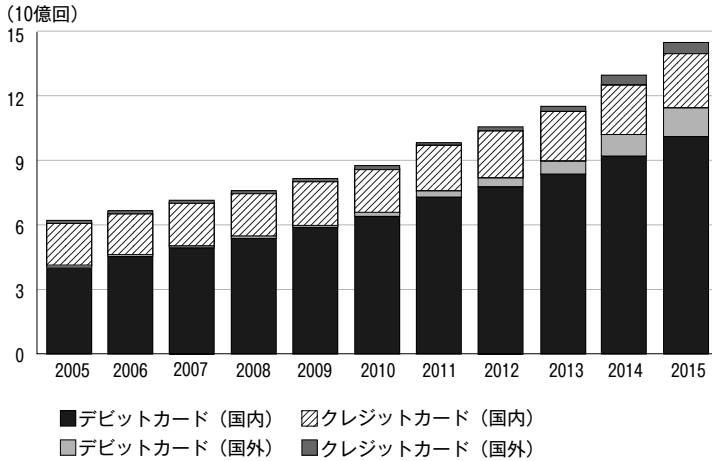
〔出所〕 UK Cards Association [2016] p.6.

三、デビットカードとクレジット カード

これまでイギリスのリテール・ペイメントにおいてデビットカード利用が急伸していることをみてきたわけであるが、デビットカードと通常よく比較されるのはクレジットカードである。実際、日本における「J-Debit」とは異なり、イギリスにおいては小売店・レストラン等において、両者のターミナルは同一であり、使用感には差はみられないのである。以下では両者の近年の利用状況についてみることにする。

まず発行枚数について図表8でみるならば、二〇〇〇年代の後半において両者は逆転しており、さらにはクレジットカードの発行枚数が減少していることが注目される。これは、前述のとおりデ

図表9 カード利用回数

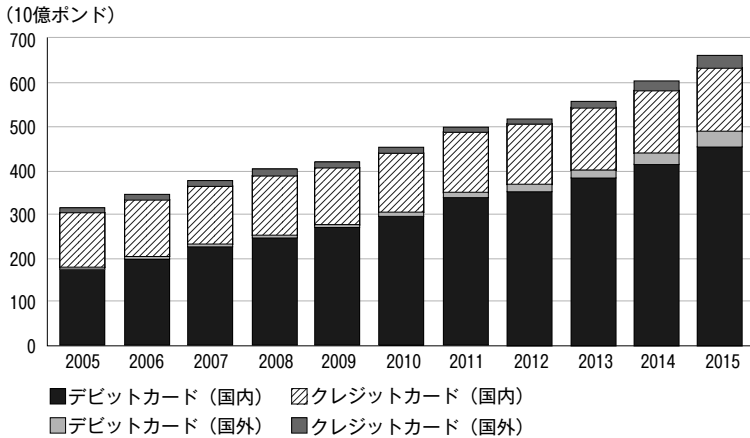


〔出所〕 UK Cards Association [2016] p.7.

ビットカードがキャッシュカードと一体化していることの他、クレジットカードには審査があることが影響している。さらにはデビットカードの利便性の増加は、年会費の存在するクレジットカードがなくなるとも生活に不便はないこと等から、近年の発行枚数の状況が説明できるであろう。

次に、支払回数・金額の状況を図表9および図表10でみるならば、ここでもデビットカードの優位は明らかである。二〇一五年でみるならば、デビットカードの支払金額は四八六〇億ポンド（うちオンライン利用は三三％）、クレジットカードは同一七四〇億ポンド（同二九％）となっている。ここで一回あたりの支払金額をみるならばデビットカードは四二・三ポンド、クレジットカードは六八・八ポンドとなっており、デビットカードの登場以来の傾向は継続していることがわかる。

図表10 カード利用金額



〔出所〕 UK Cards Association [2016] p.7.

それではデビットカードの優位の理由はどこにあるのであろうか。筆者が文献調査に加えて、今夏にロンドンでインタビュー調査を行った結果から明らかになった点は以下のとおりである。

クレジットカードには、前述のとおり審査・年会費の存在といった点があるが、それに加えてイギリスの場合は、クレジットカード利用の際に現金価格にサーチャージが付加される場合が、それほど多くはないものの存在するということが挙げられる。また、消費者自身には関係のないことではあるが、加盟店手数料がデビットカードの方が安く、小売店等がデビットカード利用を歓迎することも影響している可能性がある⁽¹⁾。これらに加えて大きいのがリーマン・ショック以降において、家計が債務を負うことに慎重になっていることもクレジットカードが相対的に伸び悩んでいることに影響している。クレジットカード金利は、住宅

ローン金利等が低水準となつてゐる近年においても高止まりしていることも影響してゐると思われ。さらには、クレジットカードについては日本のように自動引き落としではなく請求書が届いてから、何らかの手段により支払うというアクションが必要なのである。これを煩雑と感じる層が若い世代を中心に増えてきていることも影響してゐると思われる。

このことは、デビットカードが選好される理由とも大きく関連している。デビットカードは、使用額、預金残高管理が楽であり、小切手と使用感覚も似ていることが伝統的小切手社会であるイギリスにおいてそれが選好される理由であろう。そしてデビットカード利用の広がりとともに、デビットカードさえ持つていれば日常生活に不便はないという状況およびその逆の状況を作り出してきているといえるであろう。

四、進むコンタクトレス化

近年のプラスチックカードにおける技術革新において重要なものとしてコンタクトレス化を挙げることができる。イギリスにおいてもカードの発行者は、その不正利用・詐欺的使用に苦しんでゐる。それへの対応としての技術革新がICカード化であり、PIN認証であった。ICカード・PIN認証がカードの基本となつてきた中で、これに非接触型の支払い機能を付加したコンタクトレスカードが登場したのは二〇〇七年のことであるが、それは発行枚数・使用回数・使用金額ともに急増してゐるのである。このコンタクトレスカードは、使用感覚でいえば日本の電子マネーに近いものであるが、VISAがそのほとんどを占めており（この他にはMaster Card）、小

売店・レストラン等におけるターミナルも通常のデビットカード・クレジットカードと同一であり、公共交通においては交通カードとして使用することが可能である。²⁾

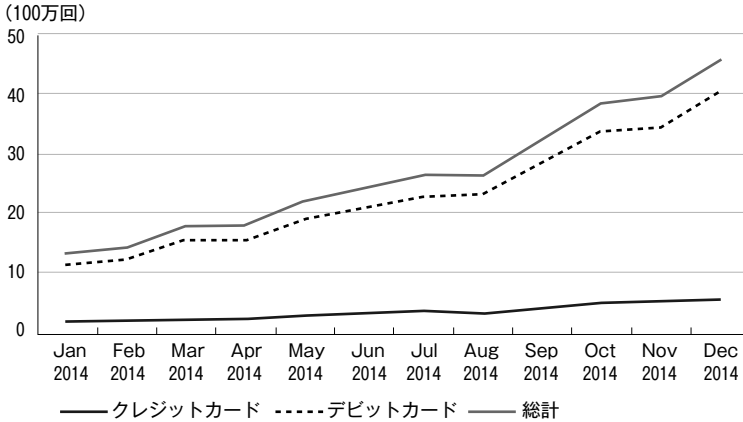
プラスチックカード全体に占めるコンタクトレスカードの割合は、二〇一三年には二四%であったが、二〇一四年には三六%、二〇一五年には四九%と急速度で切り替えが進んできており、二〇一六年初めには五〇%を超え、さらに上昇している。これに対応して小売店等におけるターミナルもコンタクトレスカード対応のもの割合が急上昇している。これによりデビットカードの平均使用金額は、従前よりさらに少額化する傾向をみせてきている。コンタクトレス化したデビットカードは、日本における電子マネーのようにコインを代替するようにもなってきたのである。

このコンタクトレス機能は、デビットカードだ

けでなくクレジットカードにも搭載することは可能であるが、クレジットカードの発行枚数の伸びはデビットカードに及ばない。これを支払回数(図表11)でみるならば、デビットカード利用が圧倒的となっており(これは支払金額ベースでも同様である)、少額支払におけるデビットカードの優位は通常使用よりも際立っているのである。

なお、イギリスにおいては一九九〇年代後半にスーパーマーケットによる銀行業務への参入が相次いだ。これとデビットカード利用の拡大とは関連しているわけであるが、この時期頃からスーパーマーケット各社はキャッシュバックサービスという業務を推進していった。この業務は顧客がカードで買い物をした際に、買い物金額に加えて現金を手渡しし、合計金額をカード利用代金とするというものであるが、このキャッシュバック額は二〇一四年以降に急減している。二〇一五年の

図表11 コンタクトレスカードの利用回数



〔出所〕 UK Cards Association [2015] p.4.

キャッシュバック（デビットカード）の一回あたりの平均金額は二五ポンドであるが、同年にコンタクトレスカードの上限金額が三〇ポンドに上昇したことの影響を受けていることが推察される事象である。近年のデビットカード利用の急伸が、現金代替により進んでいることのひとつの表れであるようにも思われる。

おわりに

以上、イギリスにおいてデビットカード利用の急伸が、リテール・ペイメントを大きく変化させてきていることをみてきた。勿論、近年においては種々のモバイル・ウォレットやブロックチェーン技術を応用したビットコイン等の仮想通貨による取引も増加しているようではあるが、大きな流れとなるには至っていない。イギリスは、もともと

と日本などに比べれば、現金利用があまり多くはなく、個人においても小切手利用が一般的である小切手社会の国であった。しかしながら現在、小売店等で小切手を用いる個人の姿はほとんどみかけない。個人の小切手利用を促進してきた小切手保証カードは二〇一一年にその姿を消すこととなった。

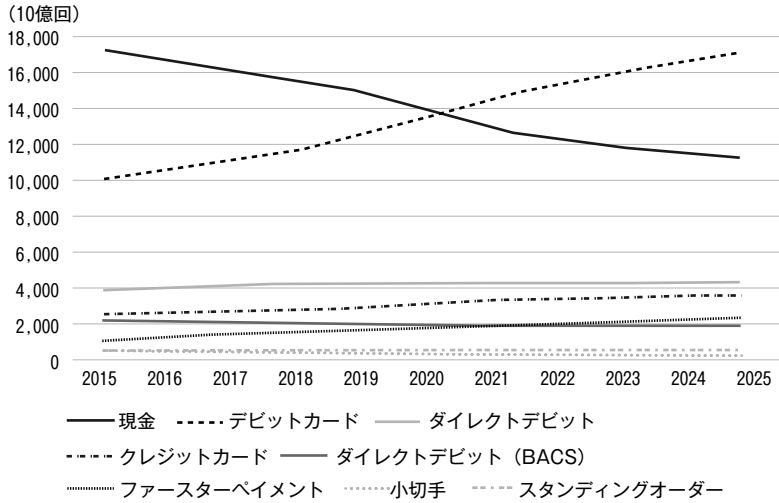
一九八七年に登場したデビットカードは、当初は小切手を代替する形でその支払回数・金額を伸ばしてきていたが、近年では現金使用を代替する形でそれらを伸ばしてきている。イギリスではデビットカードを保有しないことの不便さが、かつての小切手帳を保有しないことの不便さよりも大きくなってきているように思える。それはコンタクトレス化したデビットカードが、かつてにおいて現金利用が優位であった少額利用の分野にも進出してきたものによるのであろう。業界の予測で

は、図表12でみるとおり、支払回数ベースにおいても二〇二〇年代初めにはデビットカードが現金を上回るとしている。デビットカード優位の状況はさらに続くことが予想されているのである。これにたいして現金社会の日本においては、一九九八年に導入された「DotPay」は認知度が高まらずに低迷している。一方で、ブランド・デビットカードの伸びは急速ではあるものの、二〇一五年の支払金額は九〇〇億円以下であり、イギリスとは日本円に換算して二桁違う状況である。日本におけるキャッシュレス化の進展に、デビットカードは貢献する可能性を有してはいるが、まだしばらく時間はかかりそうであるといえよう。

参考文献

- APACS [1998] *Yearbook of Payment Statistics 1998*
Fish, T. and Whyman, R. [2015] 'How has cash usage

図表12 将来予測 (回数ベース)



〔出所〕 Payments UK [2016a] p.16.

evolved in recent decades? What might drive demand in the future?’, *Bank of England Quarterly Bulletin* 2015Q3.

UK Cards Association [2015] *UK Card Payments Summary 2015*.

UK Cards Association [2016] *UK Card Payments 2016*.

UK Payments [2016a] *UK Payment Markets 2016*.

UK Payments [2016b] *UK Cash & Cash Machines 2016*.

齊藤美彦 [2000] 「イギリスにおけるデビットカード利用とスーパーマーケットバンク」『流通』(日本流通学会) No.13.

淵田康之 [2016] 「キャッシュレス・ジャパンの実現に向けて」『野村資本市場クォーターリー』2016spring.

(注)

- (1) EUでは二〇一五年一二月に、プラスチックカード関連の加盟店手数料について、デビットカード〇・二%、クレジットカード〇・三%の上限規制を制定した。これにより両者の加盟店手数料の差は大きなものではなくなった。Brexit後の取扱いについては現時点では不明であるが、EU規制からの大きな乖離は想定されないように思われる。
- (2) スウェーデン等においては、公共交通において現金使用ができないことが話題となっているが、イギリス・ロンド

イギリスにおけるデビットカード利用の急伸について

ンにおいても二〇一四年以降、バスにおいて現金使用はで
きず交通系カード（オイスターカード・トラベルカード）
およびコンタクトレスカードのみが使用可能である。これ
はスウェーデンと同様に、運転手への危害を防ぐ観点から
のものであり、さらには運行のスピードアップを目指した
ものでもある。

（さいとう よしひこ・大阪経済大学教授・
当研究所客員研究員）